資料

夫婦間における「子育てに対する考え方」の可視化

安保　真理子[1)]・川端　愛子[1) 2) 3)]・西野　美穂[2) 3)]・佐藤　志帆[3)]・佐藤　信雄[1) 2) 3)]・植木　克美[4)]

（2020年1月14日受稿）

抄録：　本研究では，幼児期の子どもを養育している夫婦間における子育てに対する考え方を可視化することで，互いの共通点と相違点を明らかにすることを目的とし，夫婦が相互に理解を深め，子育てに取り組むことができるような支援につなげていきたいと考える．調査はPAC分析の技法を用い，個別に実施した結果，夫婦共に愛情深く，それぞれの信念や子育て観を持って子どもに関わっていた．差違は，母親の連想項目にはプラスのイメージとマイナスのイメージが混在していたのに対し，父親はマイナスの連想項目がなく9割がプラスのイメージだった．母親のデンドログラムに表れていたストレスや悩みや葛藤などの感情面が父親のデンドログラムには表れておらず，父親としての役割を意識した立ち位置を示していた．

キーワード：子育て支援，家族支援，PAC分析

Ⅰ．問題と目的

本邦では，近年，共働き世帯が増え，子育てや家事については母親だけで行うのではなく父親も役割を担う必要があるという認識が浸透してきている．2010年には，ユーキャンが実施した新語・流行語大賞では，「イクメン」という言葉が授賞語の一つとなった[1)]．イクメンとは，「育児を行う男性」を指す言葉である．しかし，このような言葉に注目が集まるということは，反面，子育てを行うのは主に母親であるという認識が未だに強く残っていることの表れなのではないだろうか．

安保は，2013年から北海道恵庭市において「ベビーマッサージCocoro」を開設し，ベビーマッサージの指導を通した子育て支援の地域活動に取り組んでいる[2)]．ここでは，子どもとその保護者を対象として，2019年11月現在までに約50回，約400組のベビーマッサージのレッスンを実施してきた．ベビーマッサージのレッスンを受講する人々は，すべて母親であり，今までに父親の受講はなかった．「父親にもベビーマッサージを体験してほしい」と求める母親の声があったため，父親が参加しやすいよう配慮し，休日に父子向けのレッスンを企画したことがあったが，父親からの申し込みはなかった．

また，ベビーマッサージのレッスン時には，マッサージの後に自由に話すことができる「トークタイム」を設け，参加した母親同士の対話による交流を促す実践を行ってきた．その中では，子育ての悩みについて語られることが多かったが，なかでも父親の家事・育児参加の不十分さが訴えられることが特に多かった．例えば，父親は「トイレットペーパーのストックを補充する」「子どもの洋服のサイズをチェックする」などの目に見えにくいが誰かがやらないと回らないいわゆる「名もなき家事」の存在すら知らないなどの声が多く語られた．しかし，母親たちの悩みを注意深く聴き取っていくと，父親が家事や子育てを行っていないというよりは，「味の濃い料理を作るから，子どもに食べさせたくない」「見通しをもたずに子どもに接するので困る」など，その「行い方」が母親に不十分さを感じさせる要因になっているのではないかと感じられた．そして，母親たちが「父

1）大学院こども発達学研究科　2）人間科学部こども発達学科
3）子育て教育地域支援センター　4）北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻

親の子育ての行い方」を不十分と感じるのは，そもそも夫婦間で「子育てに対する考え方」に違いがあるからではないかという問題意識を持つようになった．

このことに関わっては，平成21年に内閣府共生社会政策統括官少子化対策[3]が，満20～49歳のインターネット登録モニター10,054人に行ったインターネット調査では，現有配偶者（6,356人）に現在の家事・育児分担の満足度を聞いたところ，男女別にみると，現在の家事・育児分担に満足している男性は80.4％にのぼっているにも関わらず，女性は61.6％にとどまっており，男性と女性の間の満足度の差が2割にも及び，男女差が大きくなっているという結果になった．

性・ライフステージ別にみると，男性は，全体では8割前後の満足度である．長子が未就学児の場合は満足度が76.6％であるが，子どものいない層と長子が小学生以上の場合は満足度が8割を上回っている．

これに対して，女性では，子どもがいない場合は満足度が70.5％であるが，子どものいる回答者では子どもの成長段階にかかわらず満足している者が5割台である．女性は，子どもの有無による満足度の差が大きく，特に長子が小学生以上の層では男女差が大きい．

さらに性・共働き状況別にみると，共働き世帯かどうかにかかわらず，男性の満足度が8割前後であるのに対して，女性の満足度が6割前後と，男女差が大きい．

以上のこのことからは，男性が考える家事・育児と女性が男性に求める家事・育児について違いがあることが示唆されたと考えられる．

上記の調査で，性・共働き状況別にみると男女差が大きいことに着目する．共働き世帯に関して調査した内閣府男女共同参画局の「男女共同参画白書 平成30年版」[4]によると，昭和55年以降，夫婦共に雇用者の共働き世帯は年々増加し，平成9年以降は共働き世帯数が男性雇用者と無業の妻から成る世帯数を上回っている．雇用者の共働き世帯が1,188万世帯，男性雇用者と無業の妻から成る世帯が641万世帯となっている．

また，「夫は外で働き，妻は家庭を守るべきである」という考え方（性別役割分担意識）に反対する者の割合（「反対」+「どちらかといえば反対」）は，男女とも長期的に増加傾向にあり，かつ，平成28年の調査では，男女ともに反対の割合が賛成の割合（「賛成」＋「どちらかといえば賛成」）を上回っている．とはいえ，平成28年における6歳未満の子どもを持つ夫の家事・育児関連に費やす時間（1日当たり）は83分であり，他の先進国と比較して低水準にとどまっているのが現状だ．

1日当たりの行動者率で見ると，「家事」については，妻・夫共に有業（共働き）の世帯で約8割，夫が有業で妻が無業の世帯で約9割の夫が行っておらず，「育児」については妻の就業状態にかかわらず，約7割の夫が行っていない．

そして，近年では配偶者の単身赴任など，何らかの理由で1人で仕事，家事，育児のすべてをこなさなければならない状態を指す「ワンオペ育児」という言葉がインターネットを中心に広がり，ニュースでも取り上げられるようになった．「ワンオペ」とは「ワンオペレーション」の略で，コンビニエンスストアや飲食店で行われている1人勤務のことを指す．1人ですべてをこなす過酷な状況から，それを行っていた企業がブラック企業だとして社会問題となった．こうしたブラック企業の「1人ですべてをこなす」状況と近いことからネットを中心にこの言葉が使用されるようになった（コトバンクより引用）[5]．性別役割分担意識に反対する者の割合は，男女ともに賛成を上回るほど増加している一方で，男性の家事・育児参加はまだ少ないと言えよう．

しかし，久保[6]によると，母親の家庭と仕事の板挟み状態が葛藤をもたらす一方，父親も仕事と育児の板挟み状態でストレスを抱える問題も浮上している．父親の育児・家事参加を増加させるには，男女ともに働き方の見直しも必要だといえる．

先行研究において，母子関係に関する研究は盛

んに行われている．石井[7]は，これについて，家庭における子どもの成長に対する母親の影響が重要視されているためと指摘している．しかし，子どものまわりにいるのは母親のみではなく，父親・きょうだいなど他にも挙げられる．また，家族には親子以外にも夫婦・きょうだい等のつながりがある．それにも関わらず，母親の影響を重要視していることに疑問を抱く．

佐藤[8]は，夫婦関係は親子関係にも影響を与え，母と子との間にアタッチメントが形成されない理由の一つに夫婦関係がよくないことがあると言い，夫に対して怒りや不安を持っている母親は子どもに対して愛情を持ちづらいと指摘する．

また，育児における母親の重要性を指摘する研究も数多く行われてきた．亀口[9]は，夫婦共働きの家族が増えて母親の役割に変化は起きているが，それでもまだ育児の中心を担っていることは否定できないとしている．しかし，現実の生活場面では，母子だけの閉鎖システム（二者関係）内でことが終始するわけではない．核家族化が進んでいる現代では，父親の役割が重要な鍵を握っていることになる．父親が母親を援助し，いたわる役割を十分にはたすか否かで，母子サブシステムの発達と健康性は大きく左右され，その影響は乳幼児期のみならず，思春期・青年期にまで及ぶことが指摘されている．

鵜養[10]によれば，時代や社会の変化により夫婦の関係も変化し，役割行動も変わってくる．基本的には，両親ともに新生児に関わることによって，それぞれの父性・母性を高めながら母親が自分の子どもに没頭できるように環境を整え，母親を支えていく役割を自覚していくことが，父親にとって重要な役割であると考えられる．

しかしながら，いくら父親が育児参加に積極的であったとしても，夫婦間で子育ての価値観や子どもの「見方」といった「子育てに対する考え方」が違えば，母親の満足度は低いだろう．育児は参加すればよいというわけではないと思われる．大事なのは双方の満足度であり，それが家庭環境にも大いに影響すると感じる．

さらに，鷲見・秋山[11]は，男性の考える育児と女性の男性に求めている育児には違いがあり，このギャップを埋めるため，互いの意識を知り，理解し合うことの必要性を指摘している．この研究では，育児などの役割分担の話し合いをしたと思っている男性は65.9％，女性42.2％と，男性は話し合いをしたつもりになっているが，女性はそうは思わず不満があるという結果が示されていた．

以上のことから，筆者は，子育て中の夫婦が，互いに自分の考えを言語化し，相手に伝え，理解しあうことは簡単ではないということが示されていると考えた．夫婦が話し合いを行ったとしても，互いの考えが伝わらず，理解しあえていないようであれば，真の意味で話し合いがなされたとはいえないのではないだろうか．

そこで，本研究では，子育て中の夫婦を対象に，言語化されにくく目に見えない「子育てに対する考え方」を可視化することで，互いの共通点と相違点を明らかにすることを目的とする．このことによって，子育て中の夫婦が相互に理解を深め，子育てに取り組むことができるような支援につなげていきたいと考える．

Ⅱ．方法

Ⅱ-1．研究の方法

本研究では，幼児期の子どもを養育している父親と母親のそれぞれの「子育てに対するイメージ」を明らかにする．調査は，内藤[12]によって開発されたPAC分析の技法を用い，個別に実施する．PAC分析は，①当該テーマに関する自由連想及び連想・重要順位の測定，②連想項目間の類似度評定，③類似度距離行列によるクラスター分析，④研究協力者によるクラスター構造の解釈の聴取，⑤実験者による総合的解釈を通して，個人別に態度やイメージの構造を明らかにするための技法である．言語化しづらい内的世界について，質的（自由連想と対話）および量的（クラスター分析）に

分析することができる技法であると考えられるため，本研究ではこの技法を採用する．得られた結果を比較することにより，夫婦間の子育てに対する考え方の共通点と差異を明らかにする．

Ⅱ-2. 研究協力者

第1章で述べた，現在の家事・育児分担の満足度の調査において，「子どもの有無による満足度」と「子どもがいる共働き世帯による満足度」が特に男女差が大きかったことから，研究協力者は幼児期の子どもを養育している共働き世帯の夫婦1組にする．乾[13]によると，3歳から6歳にいたる幼児期後期に，親がどのような生活を送っているかということが「話を聴くときに相手を見る」「あいさつをしない人に不快感を覚える」といった無意識の反応であり，人間関係のもち方等の社会的行動の基礎となる子どもの「原初的価値観」の形成にかかわってくる大切な時期である．そして，幼児期の子どもは児童期の子どもより家庭にいる時間が長く，養育者との関わりもより多いことから，今回は幼児期の子どもを養育している夫婦を対象にした．「子育てに対するイメージ」をテーマにしたPAC分析を実施し，夫婦が個々に持つイメージや，それによって喚起される感情的な反応や態度を調査対象とする．

Ⅱ-3. 研究の手続き

Ⅱ-3-1. 調査の回数と時期について

調査は，すべて個別に，1人の研究協力者に対して2回に分けて実施する．1回目は調査用紙への記入と類似度評定を行う．2回目はインタビューを行う．インタビュー内容は，研究協力者の了承を得てIC レコーダーに録音し，後日，逐語的にテキスト化する．調査時期は，2019年12月である．

Ⅱ-3-2. 1回目の調査の手続きについて

まず，縦3cm，横9cmの大きさのカードを40枚ほど研究協力者の前に置き，「あなたは，子育てと聞いて，頭のなかに，どのような言葉が浮かびますか．頭に浮かんできたイメージや言葉を，思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください．どんなイメージでもいいです．単語でも，短文でも，言葉ならなんでもかまいません」と伝え，思い浮かばなくなるまでカードに記入してもらう．

次に，その後「言葉の意味やイメージがプラスであるかマイナスであるかの方向には関係なく，あなたにとって重要と感じられる順にカードを並べ替えてください」と教示する．

そして，項目間の類似度距離行列を作成するために，「あなたが今カードに書いた言葉の組み合わせが，言葉の意味ではなく，直感的イメージの上で，どの程度似ているかを判断し，その近さの程度を下記の尺度の該当する記号で答えてください」と教示し，A（非常に近い）からG（非常に遠い）までの次の7段階を提示し，ランダムにすべての対について類似度を評定してもらう．

非常に近い……A
かなり近い……B
いくぶんか近い……C
どちらともいえない……D
いくぶんか遠い……E
かなり遠い……F
非常に遠い……G

この類似度評定結果に関して，同じ項目の組み合わせは0，Aは1，Bは2，Cは3，Dは4，Eは5，Fは6，Gは7というように，0から7までの数値によって作成された類似度距離行列に基づき，統計ソフトHALBAU7を用いてウォード法でクラスター分析を行う．

Ⅱ-3-3. 2回目の調査の手続きについて

1回目の調査で得られた類似度評定値をもとにクラスター分析を行い，析出されたデンドログラム（樹状図）に基づいて，研究協力者との面接に

より，クラスター構造の解釈の聴取を行う．ここでは，研究協力者に承諾を得て，ICレコーダーで録音し，それを逐語的にテキスト化する．

表１　母親の連想項目一覧

重要順位	連想項目	想起順位
①	生きがい	11
②	愛情	3
③	成長の喜び	7
④	楽しい	5
⑤	将来の楽しみがたくさん	13
⑥	責任	2
⑦	大変・ストレス	4
⑧	大変だけど、幸せ	18
⑨	日常	1
⑩	毎日あっという間・時間に追われる	8
⑪	毎日、反省	10
⑫	自分を成長しなければ…と思う	15
⑬	悩み	6
⑭	子どもたちの生活や健康など、心配事が尽きない	9
⑮	何でも、子ども優先に考える	12
⑯	健康思考になった	16
⑰	親に感謝できる様になった	14
⑱	子どもといる事が当たり前になっているので、一人で外出すると寂しい	17

Ⅲ．結果と考察

Ⅲ-1．母親についての総合的解釈

(1) 母親について

研究協力者の母親は39歳である．子どもは7歳男児と4歳女児の2人である．大学卒業後，児童福祉関係の仕事をしていたが，長男を出産する少し前に退職し，長男が幼稚園の年少になる頃までは専業主婦だった．3年前に別の職種に就き，現在は子どもが学校から帰って来るまでの時間に1日約6時間のパートタイム勤務をしている．

(2) 連想項目

連想数は，18項目であった．連想内容及び想起順位・重要順位は，表1の通りである．

(3) クラスターの分割

図1は，母親のデンドログラムを図示したものである．上から順に，「生きがい」から「子どもといる事が当たり前になっているので，一人で外出すると寂しい」までをクラスター1，「子どもたちの生活や健康など，心配が尽きない」から「親に感謝できるようになった」までをクラスター2，「責任」から「悩み」までをクラスター3とした（図1参照）．

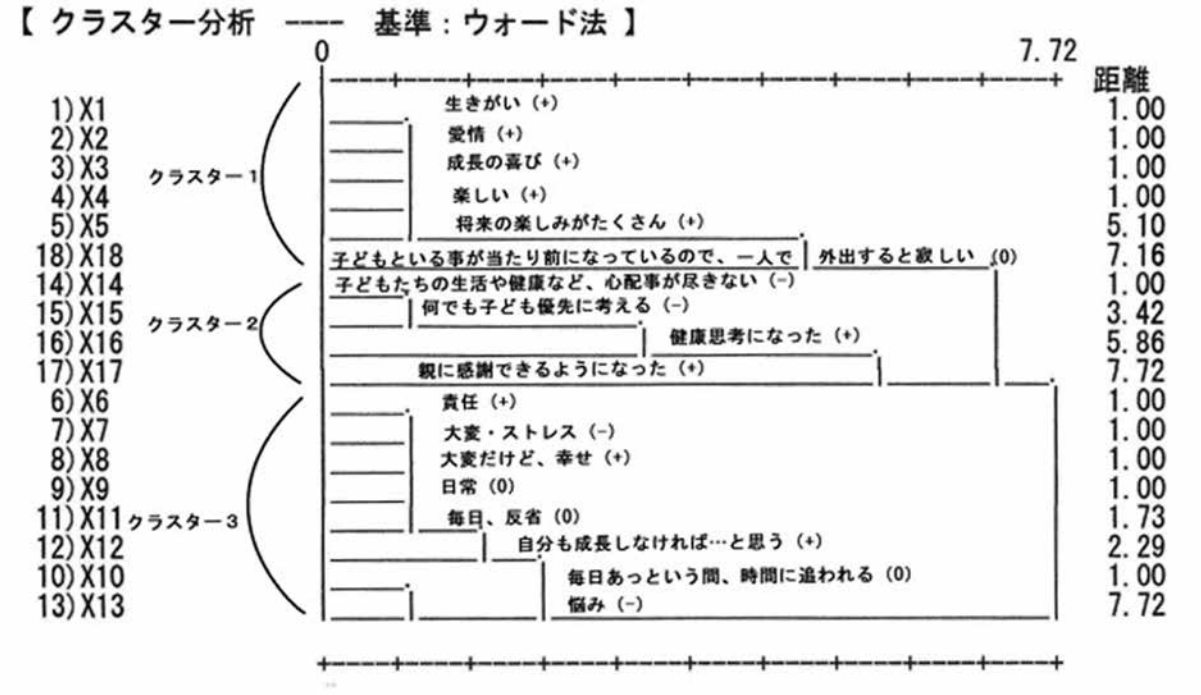

図１　母親のデンドログラム（左側の数値は重要順位であり，各連想項目の後ろの括弧内の符号は項目単独のイメージである．）

(4) 各クラスターについて

クラスター1：このクラスターでは，「子どもへの愛情」が示されている．母親は，クラスター1の連想項目を見た際に，出産前や生まれた子に会った瞬間のことを思い出すと語り，妊娠中は，出産後はどんな生活になるのかという不安もあったが，楽しみの方がずっと多かったことが示された．「落ち着いて考えると，子どもがいるということはこういうことだなと思うが，日常でわたわたと毎日の生活を送っていると，ちょっと忘れてしまいがちな．でも，ふとした時にやっぱり自分の中の根本はこれだなと思います．自分の生活の一部というか，愛情ですね」という言葉から，妊娠期から出産を通して，多くの感情が生まれていることがうかがえる．自分の人生が子どもを持ったことで良い意味で大きく変わり，「自分のことより子どもの成長や未来を考えることが多く，むしろそればかり」と言う．「子どもといることが当たり前」と「生きがい」が結びついていることが示されている．また，プラスの割合がほとんどを占めていることも特徴的で，日常が子どもへの愛情に溢れていると言えよう．クラスター1は，**＜子どもへの愛情と日常＞**のクラスターと名付けることとする．

クラスター2：このクラスターには，親になったことで変化したことが表れている．出産後，初めて子どもに触れた時にその小ささと儚さに，「自分が一生懸命やらないとだめだ」と感じたと言い，「守ってあげなきゃいけない」という言葉が繰り返し現れた．だが，その気持ちが強いために，初めての育児は少し神経質だったと語った．同時に，子どもが親がいなくても生きていけるようになるまでは元気でいなくてはいけないという気持ちから，「健康志向」に変化したことが示されている．また，自分で子育てをしてみてわかる大変さや心配事から，「自分も丁寧に育ててもらったんだな」と親に感謝できるようになったと言う．クラスター2は，**＜親になったことでの変化＞**のクラスターであると考えられる．＋と－の割合がどちらも50％で密接に関係しあっていることから，内的な葛藤も推測できると思われる．

クラスター3：産後，我が子を見た時あまりの小ささに，妊娠期には予期していなかった衝撃を受け，守ってあげたいという気持ちと共に「責任」を感じるようになったと語り，「我が子」というキーワードと「産んで対面して，より感じた責任」が示された．実際の子育ては年齢ごとに大変なことが違ってくる．親として子どもに教えてあげたいと思う反面，成長と共に一人の人間として尊重してあげなくてはいけないという葛藤も生じる．上の子どもには特に怒り過ぎているのではないかと反省し，自分の技量のなさを感じていることが語られた．「大変・ストレス」は，子どもの態度などから生じるものだけではなく，どちらかというと自分の養育態度が至らないと感じる事へのストレスが示されており，それが悩みでもあるが，「自分も成長しなければ」や「責任」がプラスのイメージであることや，「大変だけど幸せ」という項目があることから，悩みや葛藤がありながらも，子どもに寄り添い母親として日々成長しようとするポジティブな気持ちが読み取れた．同時に，「気持ちが疲れることもあるから，話せる友達や相手がいると救われる．一人じゃ子育てはできない」と語っており，自分が悩んでいることが「あるある」だと認識することで安堵したり，具体的なアドバイスをもらえたことに対して「救われている」と感じていることから，ただ話を聞いてもらえるだけではなく，子育て経験のある相手と悩みを共有したり，具体的な手立てなど解決方法を求めていることが示された．クラスター3は，**＜自分自身の問題・親側の考え＞**のクラスターであると考えられる．

(5) 母親についての所見

研究協力者である母親にとって「子育て」とは，妊娠・出産を経て，自分の人生に子どもの存在が加わったところから「子ども優先」の生活が始まり，責任やストレスを少しずつ克服しながら子育てをする中で，育児の大変さを知ったからこそ，

自分もこうやって育ててもらったんだという親への感謝に繋がっているということを読み取ることができた．また，クラスター1は「子育てのいい面」，クラスター3を「子育ての悪い面」と語り，相反するが，どちらかだけでは成立せず「深く結びついている」と感じていることがわかった．「毎日反省して大変だが，この毎日を辞めたいとは思わない．切り離せない2つ」と表現した．3つのクラスターを全体として見た時に，根本にあるのは「愛情」ではないかと思われる．子育ては喜びも含めて，やはり一人では抱えられないものであり，助けがあって成り立っていることが推察できた．

表２　父親の連想項目一覧

重要順位	連想項目	想起順位
①	子どもの将来	13
②	お金	14
③	環境	15
④	責任	2
⑤	遊び	1
⑥	父親	3
⑦	毎日	6
⑧	土日	7
⑨	褒める	10
⑩	怒る	9
⑪	子どもの友達	12
⑫	習い事	11
⑬	特別な日	8
⑭	男の子	4
⑮	女の子	5

Ⅲ-2. 父親についての総合的解釈

(1) 父親について

研究協力者の父親は40歳である．子どもは7歳男児と4歳女児の2人である．高校卒業後から現在に至るまで同じ職種でのフルタイム勤務であり，月に1回程度の夜勤もある．

(2) 連想項目

連想数は，15項目であった．連想項目及び想起順位・重要順位は，表2の通りである．

(3) クラスターの分割

図2は，父親のデンドログラムを図示したものである．上から順に，「お金」から「習い事」までをクラスター1，「ほめる」から「遊び」までをクラスター2，「男の子」から「特別な日」までをクラスター3とした（図2参照）．

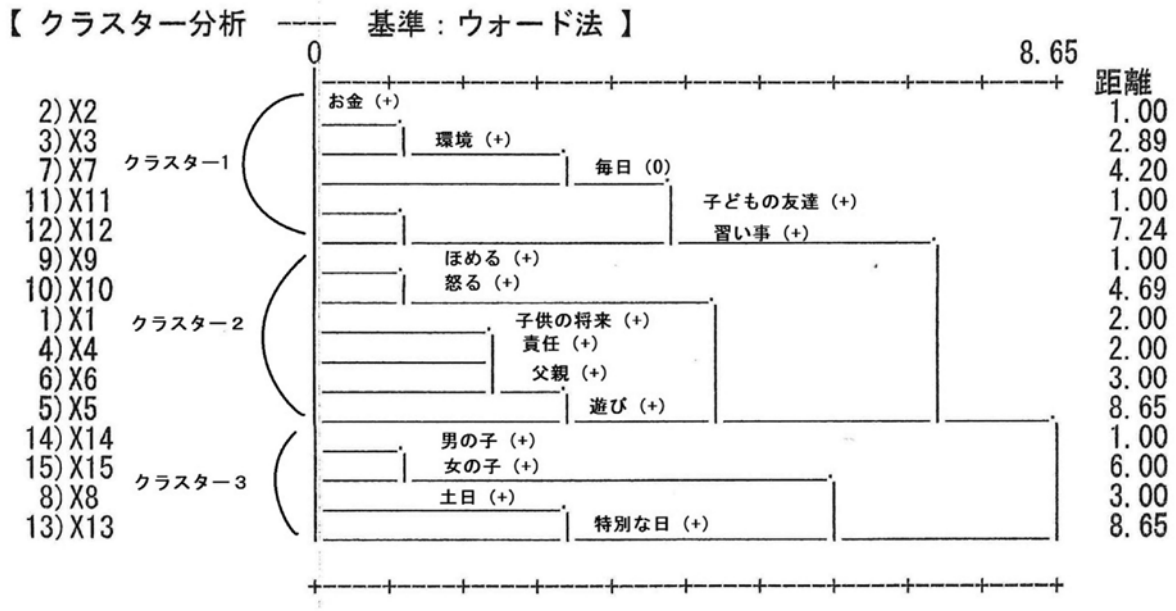

図２　父親のデンドログラム（左側の数値は重要順位であり，各連想項目の後ろの括弧内の符号は項目単独のイメージである．）

(4) 各クラスターについて

クラスター1：このクラスターでは「日常」や「子どもの人格に影響すること」が示されている．また，親は間接的に関わっているが，直接は関わっていない項目と言えよう．習い事に関しては，「自分自身はあまりやったことがないが，子どもがやりたいなら何かやったほうがいい．友達もできるし，いろいろな意味でいい．子どもが嫌だったらやめることはしょうがない」と子どもにとって良いことであるという認識と，寛容な態度が示された．クラスター1は，**＜間接的に子どもの人格に影響するものと日常＞**のクラスターと名付けることとする．

クラスター2：クラスター1と同じく子どもの人格に影響するものではあるものの，こちらは「人格的なこと」「しつけなど親として接すること」「親が直接関わっていること」など，親としてそれぞれの時に何をするかということが示されている．「責任」と「父親」に関しては，「父親としての責任があるのでは」と語り，「遊び」に関しては「正直，子どもと遊ぶのは親として楽しいことではないけれど，遊んでおいた方がいいだろうな」と語っている．また，子どもにとっては遊びが大事であり，遊びを通して学ぶことが多いと周囲から聞いたことが語られており，「小さい頃しか遊べない」「特に女の子は遊んでくれなくなると言うので」という言葉からも，親として積極的に関わりたいと思っていることが示されていると言えよう．クラスター2は，**＜親として直接子どもに関わること＞**のクラスターであると考えられる．

クラスター3：このクラスターでは「子どもの性別に関わること」や「日常の子どもとの関わり」が表れている．「男の子」「女の子」は，単純に自分に息子と娘がいるから出てきただけだと思うと振り返っており，その中で，「男女では性質が若干違う．性格も接し方も一緒に遊ぶ内容も，将来的なところも違う」と，子どもの性別によって関わり方に考えを持ち，それぞれに適した接し方をしていることが示された．「土日」に関しては，平日はたいてい朝に会い，夜に帰宅するともう寝ていることもあるので，子どもと接する機会が多いのは土日だからであり，土日が自分の出番と認識していた．「特別の日」は，誕生日や幼稚園行事，クリスマスなど子どものイベントのイメージで，「思い出をどう作るか」ということが語られた．すべてプラスのイメージであることから，子ども一人ひとりとの関わりや，自分の出番，子どもとの思い出をポジティブに捉えていることがわかった．以上のことから，クラスター3は，**＜自分ごととしての育児＞**のクラスターであると考えられる．

(5) 父親についての所見

父親のデンドログラムの特徴として顕著なのは，マイナスがひとつもなく，9割がプラスのイメージであるということだ．よって，父親にとって子育てとは「ポジティブなイメージ」と推測される．それでも，男の子は自身の経験から「子どもの頃はこうだよな」と気持ちがわかりやすいが，自身に姉妹がいないこともあり，女の子の成長過程が未知数だと語った．「お父さんは女の子に嫌われるというけど，嫌われたくない」と笑顔で答える姿に「父親心」とも言えるような愛情を垣間見た．また育児感にも触れることができ，「褒める」「怒る」は難しい．褒めればいい，褒めても意味がないなど，色々な意見があるので，何が正解なのかわからないという言葉から，日ごろから育児に関する様々な意見を見聞きし，吟味している姿や，真摯に育児と向き合う姿勢がうかがわれた．さらに自身のデンドログラムを眺めた際に，「あ，勉強を入れていない」と気付く場面があった．勉強に関して聞き取りをしていくと，「母親が重視をしているから，自分は普段もあまり重視はしていない．自分の中では，まだ子どもの年齢的に優先順位が低いということなのだろう」と語り，「奥さんがかなり一生懸命やってくれているから，自分は違う方で」と夫婦それぞれの役割を考えていることや，「ふたりでやる必要もない」「役割分担があったほうがいい」という見解を示

した．特に役割分担に関しては「片方が怒っていたら片方は怒らないほうがいい．逃げ場がないから」と，信念を持って育児に関わっていることがうかがえた．

これらのエピソードから，父親は「母親」と「母親の子育て観」を信頼し，尊重していることや，役割分担の意識を持ち，客観的に自分の立ち位置を考えながら，子育てに関わっていると推察した．

Ⅲ-3．総合的考察

夫婦共に出た連想項目は「責任」「毎日」「将来」だった．夫婦に共通して言えることは，子どもに対しての愛情があり，ポジティブで，それぞれが信念や子育ての考え方を持ちながら子どもに関わっているということである．差違は，母親の連想項目にはプラスのイメージとマイナスのイメージが混在しており，父親はマイナスの連想項目がなく，9割がプラスのイメージだった．そして，母親のデンドログラムには，多くの「感情」が現れており，連想項目が具体的であること，時間に追われる感覚やストレス，悩みや葛藤がありながらも幸せを感じており，親になったことでの変化や気づきがあった．また，子どもに寄り添い，日々反省しながら母親として成長しようとする姿勢がみられた．

一方で，父親のデンドログラムには，時間に追われる感覚や，悩みや葛藤，ストレス，反省などの連想項目はなく，子育てをポジティブに捉えており，どちらかというと「役割」など父親としての立ち位置を意識して子どもと関わっていることが示唆された．さらに，父親は自身の子育て観を持っていながらも，母親の子育て観を尊重し，「役割分担」を意識している姿勢が見られた．

Ⅳ．今後の課題

第一研究で明らかになった夫婦間の子育てに対する捉え方の共通点と相違点について，より具体的に明らかにするために，今後，第二研究，第三研究を実施したいと考えている．第二研究は，中島[14]によって開発されたPF-NOTEプロトタイプ（クリッカー）を用いて，子どもの行動場面を夫婦それぞれに分析してもらい，夫婦間で双方の「子どもの見方」には，具体的にどのような共通点と差異があるかをより詳細に明らかにしたい．さらに，第三研究では，第二研究で明らかになった結果に基づき，夫婦が互いの結果を共有し，調査者を含む三者でのディスカッションを行いたい．家族支援の視点から，子育て世帯に少しでも役立つような取り組みにしていきたいと考えている．

附　記

本研究は，本学研究倫理審査委員会の承認を得ています（承認番号：01028）．

また，本研究は本学子育て教育地域支援センターによる全面的な協力を得ました．北海道文教大学大学院こども発達学研究科前研究科長・子育て教育地域支援センター前センター長の後藤　守教授（2018年9月逝去）には，懇切丁寧にご指導を賜りました．心より感謝いたします．

本研究の趣旨を理解し快く協力して頂いた研究協力者の皆様に感謝し，深くお礼申し上げます．

文　献

1）ユーキャン：「現代用語の基礎知識」選　新語・流行語大賞第27回2010年授賞語．https://www.jiyu.co.jp/singo/index.php?eid=00027（2019年10月18日）

2）安保真理子・後藤　守：3歳以上の子どもへのキッズマッサージの有用性－母親の様々な気付きと母子双方の有用性について－．コミュニケーション障害研究，17：63-72，2017．

3）内閣府共生社会政策統括官少子化対策：平成21年度 インターネット等による少子化施策の点検・評価のための利用者意向調査　最終報告書．

https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/cyousa21/net_riyousha/html/index.html（2019年10月18日）

4) 内閣府男女共同参画局：男女共同参画白書平成30年版. http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h30/zentai/index.html（2019年10月18日）

5) 朝日新聞社：コトバンク https://kotobank.jp/word/%E3%83%AF%E3%83%B3%E3%82%AA%E3%83%qA%E8%82%B2%E5%85%90-1736392（2019年10月18日）

6) 久保桂子：共働き夫婦の家事・育児分担の実態（特集 雇用共働き化社会の現在）. 日本労働研究雑誌，59（12）：17-72，2017.

7) 石井里那子：家族システムの時間的変化. 東京学芸大学教育学部教育心理学講座松尾研究室，2016. https://www.u-gakugei.ac.jp/~nmatsuo/rina-kadai.htm（2019年10月18日）

8) 佐藤　誠：親子関係の心理　岡堂哲雄編　家族心理学入門. 培風館，1992.

9) 亀口憲治：家族システムの心理学＜境界膜＞の視点から家族を理解する. 北大路書房，1992.

10) 鵜養啓子：父性・母性とペアレンティング. 岡堂哲雄編　家族心理学入門　培風館，1992.

11) 鷲見祐介・秋山美紀：夫婦間の意識の差から見た双方が満足する男性の育児参加. 慶應義塾大学湘南藤沢学会，2014.

12) 内藤哲雄：PAC分析実施法入門〔改訂版〕. ナカニシヤ出版，2002.

13) 乾　義輝：豊かな人間性を培う家庭教育の推進－発達段階に応じた子どもの特徴と子どもへの働きかけ－. 奈良県立教育研究所指導主事研究紀要，13：1-6，2005.

14) 中島　平：レスポンスアナライザによるリアルタイムフィードバックと授業映像の統合による授業改善の支援. 日本教育工学会論文誌，32（2）：169-175，2008.

15) 中島　平：Power Feedback Note －授業の録画とクリッカーを用いたリアルタイム反応の統合による教授学習支援システム. Je LA 会誌，8：56-64，2008.

16) 後藤　守：子ども発達学研究法の探究　第1部　行動空間療法の開発と展開. 北海道文教大学　こども学の探究，1：111-140，2018.

17) 川端愛子：子ども発達学研究法の探究　第2部　子育て・発達支援プログラムを支える分析評価法. 北海道文教大学　こども学の探究，1：141-153，2018.

18) 川端愛子・後藤　守：子育て支援の場における母親ミーティングに関する方法論的検討－クリッカーを活用した母親の視点の可視化を通して－. 日本保育者養成教育学会第2回研究大会抄録集：224，2018.

19) 川端愛子：援助者の援助姿勢に影響を及ぼす被援助者の存在性に関する臨床心理学的研究. 学校臨床心理学研究（北海道教育大学大学院研究紀要），3：75-85，2005.